

〈信仰体験〉 結節性多発動脈炎の再燃と闘う社長

2024年8月22日

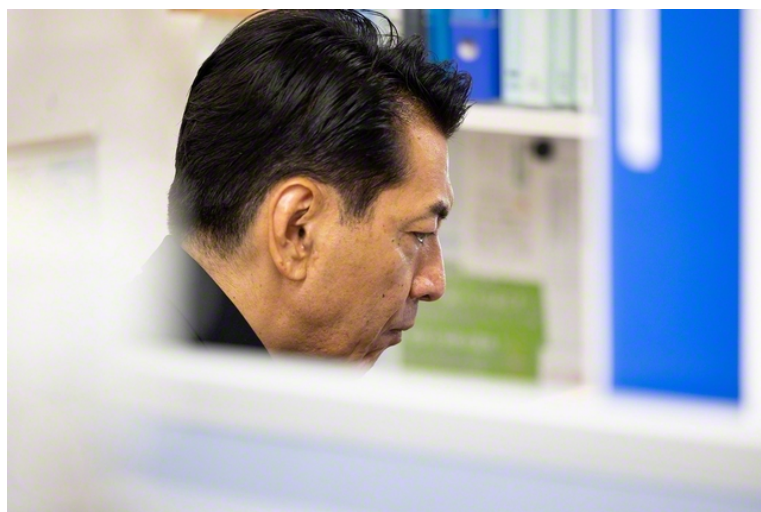
ネバー・ギブ・アップ 負けちゃいけない！

「つらさを感じさせない笑顔を」



「社長の自分が成長しないと、会社の器は大きくなりません」と長谷川さん。不景気や自身の発病など、逆境を越えてきた強さが、笑顔の奥にある

【横浜市青葉区】負けない生き方を貫く、長谷川孝さん（58）＝副区長。高校時代は「パンチパーマにグラサン掛けてね」と苦笑い。昔から根性だけはあった。社会の荒波を乗り越え、機械設計の会社社長に。サバイバルな人生を“生き残った”ように思えた。だが昨年夏、大病を再発。思わず「人生、短かったなあ」と、弱音を吐いた――。



半導体製造装置の設計などを手がける創業35年の「AZAエンジニア

リング株式会社」。長谷川さんは、会社の設立時から携わってきた。

世界最大級の半導体製造装置メーカーと協力して開発。35人の社員を抱え、機械設計の事務所として県内屈指といわれる会社で指揮を執る。

「最近では、生成AIの半導体をつくる装置の設計も。見えないところで人々の生活や産業を支えることに、やりがいを感じます」



ものづくりに興味を持ったのは、小学生の頃。縫製業を営む両親の作業場は、増改築のたびに「大工さんが、よく出入りして」。

だが家業の経営は、赤字続きだった。長谷川さんが幼い頃に父の姉から折伏され、一家で創価学会に入会。ただ両親は信仰に励まず、状況は厳しいまま。

事業が行き詰まり、小学校6年の時、住んでいた千葉から神奈川に家族で転居した。

両親のけんかが絶えず、家庭は荒れ放題だった。嫌気が差した長谷川さんは非行に走り、高校時代は番長に。「家でのストレスを発散するため、けんかに明け暮れる毎日でした」

一方、家では父が、母に手を上げる。母を守るため、弟と3人で家出した。古びたアパートに身を寄せる。部屋の隅で、御本尊の前に座る母は、しんと題目を唱えるようになった。

「このことが、長谷川家の[宿命転換](#)の始まりだったのです」



高校1年の頃の長谷川さん

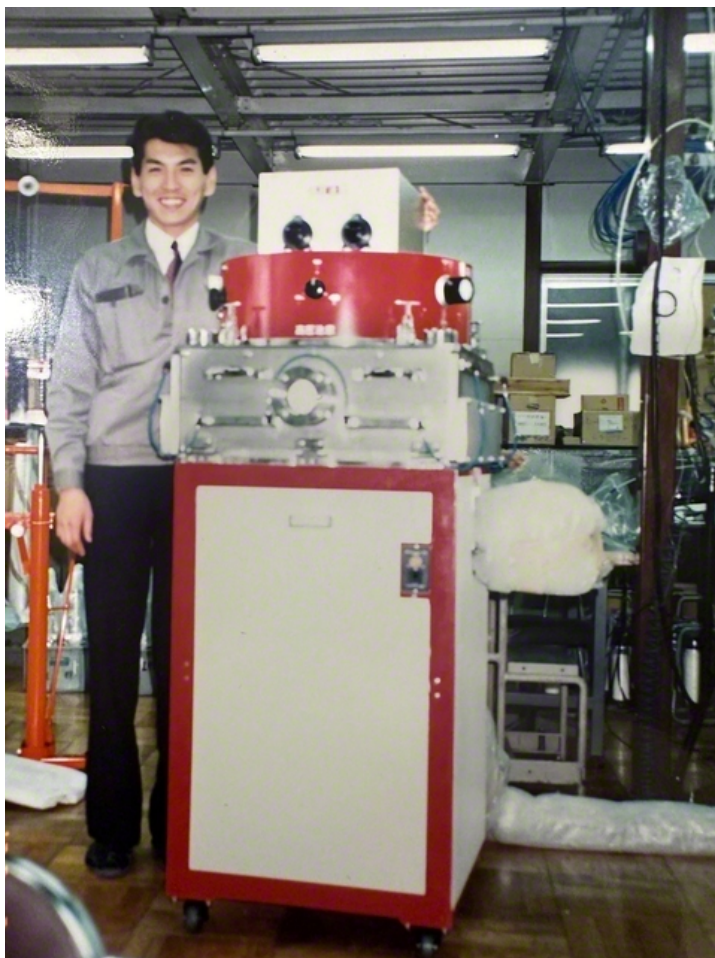
長谷川さんは高校を中退後、製造業の小さな会社に就職した。時代はバブル景気の走り。半導体関連の仕事が絶えなかった。

若さを買われ、派遣社員として大手電機メーカーへ。理系大学を卒業したエリートらと机を並べ、設計の仕事を知った。

中には、1台数億円の半導体製造装置の設計も。初号機の組み立てが、うまくいかないこともある。設計の不具合を修正し、時には、部品のやすり掛けで手から血が流れることも。徹夜作業の連続だった。

多くの社員が辞めていく「サバイバルな職場。ただ私は、ヤンキー上がりで根性だけがありました(笑)」。

派遣での4年間で「人の2倍以上働き」、機械設計のイロハを学んだ。ところが.....。



ものづくりの感動を忘れない——長谷川さんが起業前の会社で、初めて設計した半導体製造装置と（本人提供）

22歳の時、知人の借金を背負うことに。取り立て人が自宅や職場にも容赦なく現れ、「身も心も疲れ果てた」。

母に話すと、力を込めて「信心しかない」と。初めて心からの祈りを重ねた。それは、おすがりではなく「自身の可能性を開くんだ！っていう強い祈り」と長谷川さん。完済のめどは1週間で付いた。

以来、信心の確信を携え、友人に仏法対話を。「力あらば一文一句なりともかたらせ給うべし」（新1793・全1361）を己心に刻む。

23歳。同業の先輩と機械設計の事務所を起こし、専務に就いた。

独立を応援してくれた元の会社の社長には、「ヒット商品につながる設計で恩返しを」と心に決めた。

バブル景気の崩壊やリーマン・ショックの逆風も、自社の成長につながってきた。“大変な時こそ、大きく変わるチャンス”と捉えて。



笑顔あふれる家族と（前列右から時計回りに長谷川さん、妻・真理子さん、長男・佑樹さん、長女の夫・順也さんと孫・翠さん、長女・百花さん）

2014年（平成26年）6月、長谷川さんの両脚にアザのようなものが幾つも現れた。

検査の結果、膠原病の一種「結節性多発動脈炎」との診断が。動脈の血管壁に炎症を起こす指定難病。医師から「長い闘病を覚悟してください」と告げられ、入院した。

会社設立から25年。先輩から社長を継ごうとした矢先のこと。

適切な治療を受けなければ死に至る可能性があることも知った。涙をこらえ妻・真理子さん（56）＝支部副女性部長＝に言った。

「負けちゃいけないよね」



心は、池田先生の言葉に共鳴していた。

「魔を打ち破って成仏を遂げるか、魔に負けて迷妄の人生を送るか。人生における仏法の意義は、究極するところ、この根本的な勝負に勝つことにある」

渾身の祈りを重ね、本当の覚悟を決める。“仏法は勝負だ！”

当初2カ月と言われた入院を「同志の題目のおかげと治療が奏功し」、3週間で退院。長谷川さんは社長に就任した。

“さあ、ここからだ！”



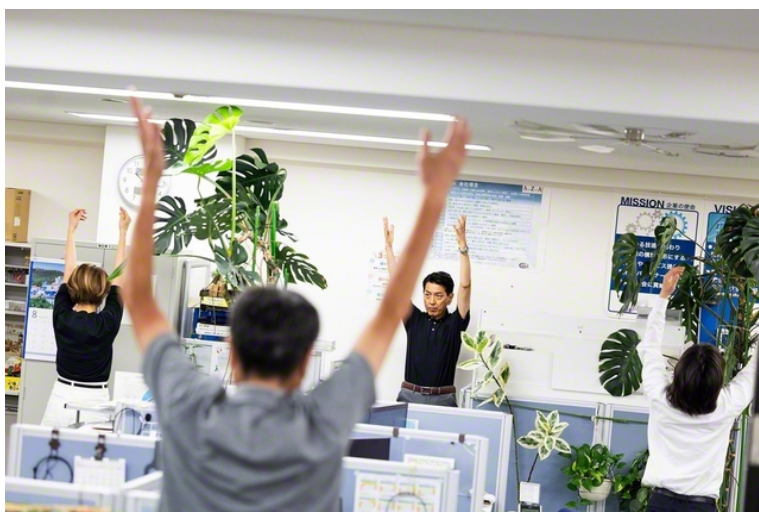
社長として、経営に関する本を数多く読んできた

死魔をはね返す陣頭指揮で、事業拡大に成功。また、全社員が職場でラジオ体操を行うなど、健康面でも多数の取り組みを。自らの病を機に「健康経営優良法人」に認定されるようになった。

臆せずに挑んだ病魔との攻防は、発症から7年を経て「寛解」に。“もう大丈夫——”

ところが、2年が過ぎた昨年夏、病気が「再燃」した。“どうして!?”

「健康オタクと呼ばれるほど」体には気を使ってきたはず。御本尊の前で、確信の揺らぎを題目で押さえ込む。



決まった時間に、社員の皆でラジオ体操を。健康推進が、モチベーションや業績の向上につながっている（中央奥が長谷川さん）

思い起こしたのは、かつて結んだ池田先生との出会いだった。1990

年（平成2年）11月、横浜アリーナで開催された文化祭。先生は、後継の友に「一切の現実には勝ち抜いていただきたい」と。

“そうだ！”

再び数年かけて寛解を目指す闘いを開始。症状は重い。免疫を抑える化学療法に耐え、免疫の異常で発症した「1型糖尿病」とも闘う。

今も、脳裏に死がよぎる瞬間がある。それでも「つらさを感じさせない笑顔を」。負けるつもりはない。

「宿命を転換するのが、私の使命です。この喜びを胸に、信心の実証を示します」

仕事も学会活動も「エンジン全開！」。ネバー・ギブ・アップの精神で、病魔に勝つ。



子や孫に受け継がれる、命の輝きを慈しむ

[おすすめ記事](#)

〈きょうの発心〉 祈禱抄 四国勝利島部女性部長 大野真由美

2024年8月21日

〈私の未来部時代〉⑥ 池田華陽会委員長 田久保華菜さん

2024年8月21日

名字の言 逆境の先に輝く“勝利の虹”

2024年7月25日

大河 330～332ページ 【小説「新・人間革命」】第14巻

2024年7月25日

今夏 広島・長崎で行事 9月に青年不戦サミット

2024年7月25日